

山と博物館

第10巻 第3号 1965年3月25日 大町山岳博物館



ニワトリとライチョウ

日本人は何か起ってしまった後に手を打つのが好らしい。トキやユウノトリも絶滅寸前になって騒ぎはじめている。

これは何もトキやユウノトリに限った事ではない。現状のままで行けば近い将来カモシカやライチョウが、トキ、ユウノトリの運命をたどらないとは限らない。明治末期までこの北アの麓にイノシシがすんでいた記録があるが、今ではまったくその姿を見ることはできない。豚コレラが流行し全滅したのではないかとわれている。

聞くところによると、北アルプス、穂高岳や立山では山小屋が残飯整理のためかニワトリを放し飼いで飼育しているという。

高山で生活し抵抗力の少ない鳥に、低地から上げたニワトリの病気でうつろうものなら全滅である。ニワトリの病気が移る事がないとはいえない。昨年人工増殖でフ化した博物館のライチョウが10月末「鶏痘」で死去している事実からその可能性は十分にある。各山小屋がニワトリを飼うようになれば、人工的にわざわざライチョウ全滅を計ってやるようなものである。

ライチョウは国の特別天然記念物として保護が加えられている。しかし、高山でニワトリを飼ってはいけないという規制はどこにもない。山小屋経営者の良識にだけうたったえ、傍観しているよりしかたないだろうか？

(千葉彬司)

秩父宮記念学術受賞のこと

藤 巻 厚 美

秩父宮記念学術賞

秩父宮殿下は、日本学術振興会総裁として昭和八年から総裁退任の昭和二十二年まで十四年の永きにわたって、学術振興のことに努められた。

殿下は昭和二十八年一月四日逝去されたが殿下が生前ご関係された団体が相集まって協議し、殿下のご業績を記念する事業を起さん

表彰状を受ける大町市長



ことを期して準備を進めていたが、昭和二十八年十月、財団法人秩父宮記念会の設立が認可され、理事長に前田利男氏を決めた。

秩父宮記念会はずいぶんの事業を行なった。

- 1、ご事蹟に関する資料の編集
- 2、記念碑の建設
- 3、記念スポーツ会館の建設
- 4、記念褒賞制度の制定
- 5、記念奨学金制度の制定

4の記念褒賞制度の制定をのぞく他の事業はすでに多大な成果をのこして終了したが、4の日本学術振興会総裁として十四年間にわたって挙げられたご功績を記念し「秩父宮記念学術賞」を制定し、授賞その他を日本学術振興会に委託するといふ、記念褒賞制度の制定は準備に時間を要して未だ行なわれていなかった。

第一回授賞

秩父宮記念会設立以来前記各種の事業を行なうため、必要な資金を募集し、日本学術振興会も記念学術賞制定のための募金に協力した。準備も整い記念会は、日本学術振興会に対し、この事業の実施について依頼し、振興会も理事会などの議を経て、山に関する科学で顕著な成果を挙げたものに対し、人文・社会・自然科学を通じて一年一件に授賞することとし、そ

の候補の推せんを日本山岳会に依頼すること条件として受託した。

日本山岳会においては、昭和三十八年度第一回の授賞に關し選考会議を開き、審議の結果「ネパール・ヒマラヤにおける学術的調査研究」に対し、生物誌研究会会長菅田讓治氏に授賞することに決定、その旨学術振興会に推せんした。この「ネパール・ヒマラヤにおける調査研究」は、昭和二十七年から二十八年にかけて生物誌研究会が行なったもので、その成果は当時京大教授(現国立遺伝学研究所長)木原均博士によってまとめられ、

Fauna and Flora of Nepal Himalaya
Land and Crops of Nepal Himalaya
Peoples of Nepal Himalaya

の3巻に集大成されている。この3巻の報告書は、文部省の研究成果刊行費の補助を受け日本学術振興会から出版されたが、44編の報告に7百90枚の写真および図を加え、総ページ3百44ページに及んでおり、久しく鎖国政策をとってきたネパールを科学的に世界に紹介した最初のものとして各国から高く賞賛されている。

市立大町山岳博物館の授賞と業績

市立大町山岳博物館は創設以来の活動業績が認められて、第二回の受賞者として、日本山岳会から推せんされた市立大町山岳博物館は、昭和二十六年十一月一日に、日本アルプスの麓、大町に創設されて以来、今日まで、関係者のなみなみならぬ努力によって山の科学に数々の貢献をしてきたというもの。

たとえば、昭和三十年「博物館友の会」を結成して、野外活動を盛んにし

自然保護をねらいとした月刊普及紙「山と博物館」を刊行して今日に至り、また三十一年には野外博物館(自然園)創設の運動を起し居谷里湿原の総合学術調査団を組織して、地元研究員を総動員、二六〇〇余点の資料を取集した。

又関西電力の委託を受けて、黒部川上流域の雨量調査を進めるかたわら、湖底に没する黒部溪谷をはじめ、北ア全山を踏査して、北アルプスの開発と自然保護の方面を見定めるよう努力した。その結果黒部ダムへのルート

針ノ木岳調査の隊物



をはかってきた。

三十三年四月から「針ノ木自然園」開設のため、信州大学教育学部生物教室の協力のもとに行なった組織的な基礎調査の成果は多数の写真と図表を含む一八六ページの「針ノ木岳・自然とその保護」として出版されているこれらの自然保護活動は、県、国の認めるところとなり、三八年八月には厚生大臣から表彰された。

その他「山の自然科学教室」の開催とか、高山植物の生態ならびに低地栽培の研究、野鳥標識調査、特別天然記念物の飼育増殖と保護策の実施等、数限りない業績がある。

ライチョウの調査



とくに「北ア動物生態研究グループ」(本館調査員と信州大学生物教室で構成)と山岳博物館の共同研究である「ライチョウの生態研究」は異色あるもので、その成果は「雷鳥の生活」として、カラー写真五枚、モノクロ写真一八枚、図版二四枚を含む一七〇ページの図書にまとめられている。三年間にわたって延一三〇〇人以上の調査員を投じて、進められた組織的な調査のようすとその調査を通して知られた未知のライチョウの生態が明らかにされ、学術上貴重な資料を提供した。

これらの調査研究の成果は大町山岳博物館建設記録

機関紙「山と博物館」

博物館職員調査員プリント集

大町山岳博物館研究報告

針ノ木岳―自然とその保護

単行本「雷鳥の生活」

等の印刷物に収められている。

これからの展望

秩父宮記念学術賞の授賞は一人大町山岳博物館の名譽にとどまるものではない。

創設以来地道に調査研究を続けてきた職員や調査員、それを支え励まし協力してきた多くの人々の善意と努力に冠せられたものである。

山岳博物館の設備や展示物は山岳を中心とした特色あるものであり、訪れる登山者たちに良い参考となる内容も多いが、こうしたどちらかとも云えは静的な内容よりも、現在まで十余年にわたって行なわれてきた、山岳を中心とした野外の調査活動と自然保護運動という動的な内容にてそ活動する博物館としての真価があ

ったと云える。

従って今後共、この種事業は精力的に推し進めねばならないし、秩父宮記念学術賞の授賞を契機として更に発展への具体的な方策を見出さねばならない。

現在館としては、同賞授賞を記念して、新しい記念事業を起すべく検討中である。

青少年山岳センター(扇沢地区に集団施設を設け、地元及び各地の青少年を受け入れ自然の探究と保護思想の普及を計る)記念出版(本館職員・調査員の調査研究活動の報告書)登山学校(日本山岳会の代表を招き登山技術などの普及)ライチョウセンター(ライチョウの人工増殖センター、禽舎増改築)その他動物園施設、資料収集などが話し合われているが、いずれにしてもこの名譽を汚すことなく、山の科学と自然保護運動の普及に努めて行きたい。(館長)

スケッチ

大町山の会新役員

昭和三十九年度の総会が、去る三月二十一日、山岳博物館講堂で開かれ、昭和四十年役員が選出された。

- 会長 長沢修介
- 副会長 菅沢六海
- 会計 降旗 多
- 庶務 唐沢清光
- 器具 内田博文 山口一也
- 編集・記録 小林吉男
- 岳運理事 荒木宏治
- 評議員 久保田稔 荒木(兼)
- 新人担当 武田武 福島融 千葉彬司 伊藤弘

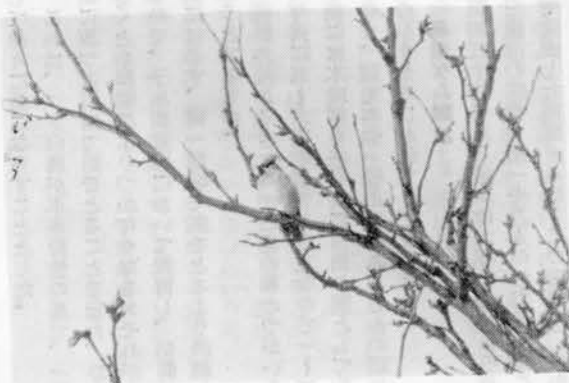
ヒレンジャク

長沢修介

天気予報が西高東低を告げ、細かな雪が音もなく降り積って、人々はユツツにしがみついている。そんな頃この鳥は庭先の小柿などを食べに大群でやって来る。尾の先端の紅色のヒレンジャク、黄色のキレンジャクがあるが年によって渡来数に大きなむらのある鳥である。

当地では例年1月の初旬頃から人家の附近に出現するが今年は2月に入ってから少群が現われたと思ったら2と3日して50羽位の大群となりおそく飛来した割合にその数が多いようである。

ヒーヒリヒリ等細い声で鳴き、特にヤドリギの実を好み、ヤドリギの実の伝播もこの鳥が主役であるようだ。



山の詩歌碑

福沢武一

長塚節歌碑

諏訪市霧ヶ峰雄舞社畔

上諏訪駅前をバスが発車したのは十時半。急勾配の石ころ道を除行する。浅い峽がどこまでも続く。視界がひらけると、そこが強清水のキャンプ地。前方は黄緑のゆるい傾斜面東にせり上ったところが車山。よく晴れた空際草山の輪郭がきわだっている。尾根に当るところを南する。西の傾面は落

葉松の疎林。いきついたところにちらつく物影。それが案の定、歌碑の岩石だった路傍にうすくまっただ自然石に碑の石板がはめ込まれている。いまでも午前の陽を受けて字面がこまやかに浮いている。うれしくもわけこしものか遙々に松虫草のさきつゞく山 節

よってその中の中心作家の一人であった。四年、婚約がなったが、咽喉結核の診断を受け、これを破棄した。その後は関西・四国・九州の各地に転地療養。大正三年、一世の絶唱「鉦の如く」が歌いつがれた。翌四年、九州大学の大学病院で最後の息をひきとった。三七歳という若さだった。主題歌はこうした薄幸の歌人の最も幸福な季節そのものだったといっている。

して徐々に湖にならすこととした。これは、ユブ白鳥が本来野性の鳥で、一度湖に放つと餌場で餌をとることを忘れ、ひもじくとも餌場によりつかなくなるおそれがあるので、予め馴致場において飼育し、給餌時間には必ず、同一餌場で餌をとるよう訓練しようとするもの。

皇居外苑からきたユブ白鳥の親のつがいも今年更に五つ六羽孵化する予定なので一二年後には木崎湖も名実共に白鳥の湖として生れ変わり、観光客や一般市民のみなさんの眼をたのしませることができそうだ。

黒部ダム開放



長塚節は明治三十八年九月初め、甲州から諏訪へ入った。六日、霧ヶ峰にのぼった。同行は信州の同志赤彦、胡桃沢勘内ら。石ころ路を徒歩だったことはいうまでもない。路傍には薄が穂にでていた。草地の見晴らしにでたとき主題歌の詠嘆が口をついてでた。歌集に「霧ヶ峰」とある三首中の第一。八日には塩尻峠を越えて桔梗ヶ原へで、木曾を経て一路美濃へ急いだ。時に節二七歳の若盛りだった。

節は明治一二年茨城県に生れ、水戸中学時代から作歌を初めた。三三年子規門に入り、左千夫、麓らと相識った。それが二二歳。三六年、アシビの主要同人として諸方へ旅立ちが多くなった。当霧ヶ峰への旅も信州の歌人たちと志を通ずることに目的の一つが置かれていたはず。翌三九年、「炭焼きの娘」、四三年には長篇「土」に着手。短歌とやらんで小説にも傑作をのこした。四二年アララギ創刊。節は実作に

木崎湖を白鳥の湖に
一羽のオオハクチャウの飛来を契機に、木崎湖は昭和三十六年一〇月、水きん保護のため禁猟区に設定されたが、その後山博では県名勝木崎湖を白鳥の湖とするため、皇居外苑からユブ白鳥一つがいを導入し、増殖につとめるなど準備につとめていたが、ユブ白鳥も五羽に増えたので、とりあえず馴致場を設置

昭和三十三年から足かけ六年の歳月と五百十三億円の巨費、延一千万人の労力を注ぎこんで完成した黒部ダムは、この四月二〇日から一般解放二年目を迎える。

工事用に造られた扇沢から赤沢岳の下をくぐって黒部川に通ずるトンネルをコンクリート巻きして、トロリーバスで結び一般観光客に秘境黒部を覗てもらおうという訳だ。

博物館 ニュース

木崎湖を白鳥の湖に

一羽のオオハクチャウの飛来を契機に、木崎湖は昭和三十六年一〇月、水きん保護のため禁猟区に設定されたが、その後山博では県名勝木崎湖を白鳥の湖とするため、皇居外苑からユブ白鳥一つがいを導入し、増殖につとめるなど準備につとめていたが、ユブ白鳥も五羽に増えたので、とりあえず馴致場を設置

表紙説明

秩父宮記念学術賞銅牌

撮影 千葉 彬 司

山と博物館 第十巻第三号

発行所 一九六五年三月二十五日発行
長野県大町市T.E.L.(大町)二二一

印刷所 大町山岳博物館

信州印刷大町工場

お問い合わせ 「山と博物館」の購読者をつのって

おります。年間三〇〇円(送料共)大町山岳

博物館宛お送り下さい。